



Title	母親の受けた養育とQソートにみる母子愛着関係
Author(s)	斎藤, 早香枝
Citation	北海道大學教育學部紀要, 74, 49-62
Issue Date	1997-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29542
Type	departmental bulletin paper
File Information	74_P49-62.pdf



母親の受けた養育と Q ソートにみる母子愛着関係

齋 藤 早香枝

Connection between Mothers' Own Bonding Styles in Childhood and the Current Relationships with Their Own Children

Sakae SAITOH

ABSTRACT

This paper examines how past relationship between a woman and her parents is connected with current relationship between her and her infant child. 37 pairs of mothers and infants were studied from the time when the infants were 10 months until when they were 18 months. When the infants were 10 months, using Parental Bonding Instrument (PBI), their mothers were asked to assess their own relationships with their parents. At this same age, mothers were also asked to complete a questionnaire, Parenting Stress Index (PSI), to obtain their views about their current childrearing experience, especially the stress therein. When the infants were 18 months, their relationships with their mothers were assessed by two investigators observing mother-infant interactions at their own homes using attachment Q-sort (AQS). Results showed (1) that types of parental bonding experienced by the mothers were related to the amount of stress in rearing their own children, (2) that the assessed bonding with one's parents was correlated with current mother-infant relationship as observed. The implications of the results were discussed in connection with the concept of internal working model (IWM).

I 問 題

幼少時期の母と子の関係は、子どもの発達に大きな影響を与える。そのため、どのような要因が母子関係に関係するのかという問題に関しては、これまでに様々な研究がなされてきた。その中で、近年、母子関係の形成要因として母親の受けた養育に注目した研究が欧米を中心に行われてきている。

子どもの頃に受けた養育体験が、実際に子どもをもった時の母子関係に影響するという考えは、以前からも臨床からの報告や虐待研究などで指摘されてきた（遠藤，1992a）。愛着理論を打ち出した Bowlby は、その著書の中で内的ワーキングモデルという概念を用いてこうした世代間伝達について説明している。特定の養育者との相互作用の繰り返しの中で、〈養育者についてのワーキングモデル〉と、それに相補的な形で〈自己のワーキングモデル〉が、乳幼児期を通じて徐々に形成され、やがて他者や世界についてのワーキングモデルに般化され、経験とともに更新と修正を繰り返しながら、生涯にわたって対人関係行動に作用する。それはまた自分の子との関係においても同様であるという論理で、世代間伝達の問題が説明される。こうした愛着の内的ワーキングモデルが母子関係に与える影響については、Main ら（1984）が、成人の愛着の表象（愛着の内的ワーキングモデルの content）を取り出す半構造化された面接法 Adult Attachment Inter-

view (AAI)を開発して以降、AAIで得られた母親の愛着表象のパターンとStrange Situation (SS)のパターンとの一致をみる研究が欧米を中心に行われ、その一致率はおおむね60~80%の間で報告されている (Fonagy, Steele, & Steele, 1991; Ainsworth, & Eichberg, 1991; Benoit & Parker, 1994; Steele, Steele, & Fonagy, 1996)。しかし、SS法に関しては、これまでの研究で日本の乳幼児にとって分離場面のストレスが高すぎるという問題点が指摘されており、文化を越えた測定法としての課題をもつ (Takahashi, 1986)。また、AAIの分類は、まずはじめにSS法による愛着の分類があり、分類されたそれぞれの母親が自分の幼少時期の母との関係をどのように語るかという方向からその特徴をまとめたものといえ、はじめからSS法の分類を強く意識したものといえる。

このような状況の中、日本において母親の養育体験に着目した研究はまだ数が少ない。遠藤ら (1991) は、多数の被験者を用いた養育行動の規定因に関する調査を行い、母親の生育歴と子に対する意識や養育行動との関連を示唆する結果を得た。また、藤井 (1993) は、Parkerらが考案したParental Bonding Instrument (PBI)を用い、母親の回想する“親から受けた養育”と“育児にまつわるストレスや子どもとのきずな (bond)”の関係について調査した。PBIでは、親の養育態度は、“care”と“over-protection”の2つの次元で4タイプに分けられる (Fig. 1) が、藤井の結果では、母親が親から受けた養育が、〈保護的で自立を奨励するタイプ〉の場合、最も母親の育児に関するストレスが低く子どもとのきずなが形成されやすく、逆に、親の養育が〈無関心、拒否的で統制的なタイプ〉の場合に、母親の育児に関するストレスが最も高くなり子どもとのきずなの弱さを感じやすい傾向のあることが見出され、母親が親から受けた養育のタイプと母親の育児に関するストレスや、子どもとのきずなに関する認識との関連が指摘された。しかし、これらの研究は、母親の生育歴や養育体験と現在の母子関係とに何らかの関連を見いだしてはいるが、方法論的問題からいくつかの課題を残している。第1に母親の生育歴や養育体験の調査と現在の子どもの関係の調査が同時点であるため両者に関連があったとしても因果の方向性が不明瞭といえる。Sroufeら (1985) は、子どもを実際に養育する体験が自分の生育歴や親に対する叙述や評価に影響する可能性を指摘している。従って、母親の受けた養育体験がどのように現在の母子関係に影響するかをみるためには、養育体験の調査を母子関係の調査より先行して行うことが必要となってくる。第2に、母子関係に関しては母親からの回答で評価しているため、母親がどのようにとらえているかという母親の認識にとどまっている。母親の認識は、実際の母子関係を反映はするがイコールではない。実際の母子関係を客観的な指標をもって評価することが必要と考える。

以上の点より、本研究の目的は、藤井の研究をもとに母親が子どもの頃に受けた養育体験が現在の母子関係にどのように影響しているのかを母親の認識からだけではなく、のちの実際の母子の観察からも検討することである。母子関係の測定に今回は、家庭での観察から愛着関係を評定するQソート法 (AQS) (Waters, & Deane, 1985)を用いた。これは、愛着理論に基いて“母親を探索の安全基地とする子どもの行動”をみるものであり、SS法が実験室場面におけるストレンジャーとの遭遇や母親との分離場面から判断するのに対し、家庭での自然場面から評定するため、生態学的妥当性が得られ対象者に対するストレスが少なく、文化の枠を超えた適応が可能であるという利点をもつ (近藤, 1993)。このような特徴から、SS法に代わるものとして本研究において採用した。

Ⅱ 方 法

本研究は、母親の受けた養育に関する調査、母親の現在の育児についての認識の調査、現在の母子関係の観察からなる。前者2つは、子どもが生後10ヶ月の時点で行われ、母子関係の調査は、生後18ヶ月時に行われた。以下に、手続きの詳細について述べる。

1 対象者

保健所での4ヶ月検診時に母子の縦断的研究への協力を依頼し、第1子を養育中の母親45名が同意、そのうち43名が生後10ヶ月時の調査に参加し、38組が生後18ヶ月時の家庭訪問に応じた。今回は、両調査に参加した37組について報告する。被験者の属性は Table 1 に示すとおりである。

2 手続き

1) 母親の受けた養育に関して

(1) 調査時期と対象児の月齢

1996年9月中旬～12月上旬にかけて行われた。対象児の月齢は、平均生後10.2ヶ月（9ヶ月～11ヶ月）であった。

(2) 調査用具と手続き

母親の養育体験の調査には、Parental Bonding Instrument (PBI)(Parker, G., Tupling, H., Brown, L. B., 1979)を用いた。これは、親の行動・態度から親とのきずな (bond) を評価するものである。親の子に対する養育態度に関する25項目からなり、結果は、「保護 対 無関心、拒否」(“care”の軸)と「過保護 対 自律の奨励」(“over-protection”の軸)の2つの次元で4タイプに分けられる (Fig. 1)。これまで諸外国や日本での研究においてその信頼性と妥当性が確認されている (Parker et al 1979; 小川1991)。本研究では、縦断研究の観察のため来所してもらった際に、母親に子どもの頃の自分の父・母それぞれがどうであったかを質問紙に「全くそのとおりだ」(4点)から「全く違う」(1点)までの4件法で回答してもらった。今回は、母親の両親のうち分析の終わっている母の養育態度の結果について報告する。また、Parkerらが“over-protection”としている「私のプライバシーを無視していた」という質問項目を、日本人の場合は“care”として扱った方が妥当であるという小川(1991)、藤井(1994)の先行研究に従い、本研究でも“care”の項目として扱った。

2) 母親の育児に関する認識について

(1) 調査時期と対象児の月齢

1996年9月中旬より12月上旬にかけてPBIと同時にされた。対象児の月齢は、平均生後10.2ヶ月（9ヶ月～11ヶ月）であった。

(2) 調査用具と手続き

母親の育児に関する認識を、ストレスという観点からParenting Stress Index (PSI)の一部を用いて調査した。Parenting Stress Index (PSI)は、Abidin, R. R.によって1979年に考案された親業に伴うストレスを測定するもので、親についての質問項目（親領域）と子に関する質問項目（子領域）からなる。日本では、野沢（1988, 1989）によって日本語版の妥当性が検討されその後の改訂により関西学院 Parenting Stress Index (KGPSI) が作られた。子の発達段階により母親のストレスの因子構造は変わるが、生後6ヶ月から1歳8ヶ月の子どもを持つ母親388名を対象にし

た藤井の研究(1994)では、“親としての自身のなさ”、“子どもの行動特徴に関する懸念”、“親役割による欲求不満”、“配偶者の非協力・家族との対立”、“子どもとbondの弱さ(emotional coldness, neglect)”、“子どもとのbond(cloesnes, affection)”(注1)の6因子62項目が抽出されており、本研究ではそれを採用した。生後10ヶ月時の来所時に「よくあてはまる」(5点)から「全くあてはまらない」(1点)の5件法で質問紙に回答してもらった。育児にまつわる困難や不満が高いほど得点が高いという設定である。

3) 行動観察による母子関係に関して

(1) 調査時期と対象児の月齢

1997年5月中旬～9月上旬にかけて実施された。対象児の月齢は、平均18.8ヶ月(18ヶ月～20ヶ月)であった。

(2) 調査用具と手続き

母子関係に関しては、愛着関係の安定性という視点より、愛着のQソート法(AQS)を使用した(注2)。これは、1985年にWatersとDeaneによって考案された愛着関係の評定法で、12～48ヶ月の子どもの日常場面にみられる愛着行動・探索行動・気質の特徴などが90枚のカードに書かれており、それを対象の子どもにあてはまる程度によって10枚ずつ9段階に分類し、その結果とあらかじめ愛着研究者によってなされた“安定した愛着形成の子ども”を想定した標準分類との相関値から愛着を評定するものである。相関値が高いほど安定した愛着関係を示すことになる。本研究では、生後18ヶ月時に発達心理学を学ぶ大学院生2名ないし1名が家庭訪問し、日常場面を観察、評定した。訪問に先駆けパイロットによるAQSの訓練を行い、訪問者2名の評定の相関が.80に達してから実際の訪問を行った。基本的には、母親に日常いつものように過ごしてもらう中での子どもの行動の観察を中心に行ったが、短時間で効果的な観察結果を得るために、以下に示すような半構造化された訪問を行った。

- ・動くおもちゃを見せ、それに対する子どもの反応をみる
- ・田中・ビネー知能検査用具の型はめや積み木を高く積むことを子どもにさせる
- ・ひもとおしセットを使って、ビーズにひもを通すことを子どもに見せて教えて欲しいと母親に依頼する
- ・子どものいる部屋からの一時的な自然な退室を母親に依頼する(子どもが後を追っても構わないことを教示)

持参したおもちゃや道具は、いずれも遊びのひとつとして提示し、その反応をみることを目的としている。また、実際に観察することが困難な項目(例えば、「お母さんが、お子さんをお父さんやおじいさん、おばあさん、よく知っている人に託して外出すると、泣く」など)に関しては、母親への質問により補った。所要時間は1ケースにつき約2時間から2時間半であった。

Ⅲ 結果と考察

1 母親の受けた養育と育児ストレスとの関係

母親の受けた養育と現実の育児に関するストレスとの関係を見るために、まず、PBIの結果を“care”の項目と“over-protection”の項目別に得点化し、PSIの下位尺度との関係を検討した結果、親の養育態度で愛情・情愛的温かさ・共感性を意味する“care”の項目が低い、すなわち、自分の母親は自分に愛情をもって接していたという実感があまりない場合は、育児やしつけの面での親としての自信がなかったり、子どもの自分に対する愛着の薄さや、育てにくい子どもとい

Table 1 被験者の属性

母の年齢	平均29.7歳 (22~40)
母の学歴	中卒2.7% 高卒37.8% 短大・専門学校卒51.4% 大卒8.1%
母の就労状況	生後10ヶ月時 専業主婦35名 (94.6%) 有職者2名 (5.4%) 生後18ヶ月時 専業主婦31名 (83.8%) 有職者6名 (16.2%)
配偶者の年齢	平均32.6歳 (23~45)
配偶者の学歴	高卒43.2% 短大・専門学校卒18.9% 大卒35.1% 大学院卒2.7%
家族形態	核家族36組 複合家族1組
世帯収入	250~500万 67.6% 500~750万 16.2% 750万以上16.2%
対象児の生年月日	1995年11月~1996年2月
性別	男18名 (48.6%) 女19名 (51.3%)
母親の母の年齢	平均57.4歳 (45~75)

Table 2 PBI・PSIの相関

PBI/PSI	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
"care"	-.523***	-.399*	-.422**	-.182	-.527***	.063
"over-protection"	.273	.195	.074	.113	.451**	.101

*** P < .001 ** P < .01 * P < .05

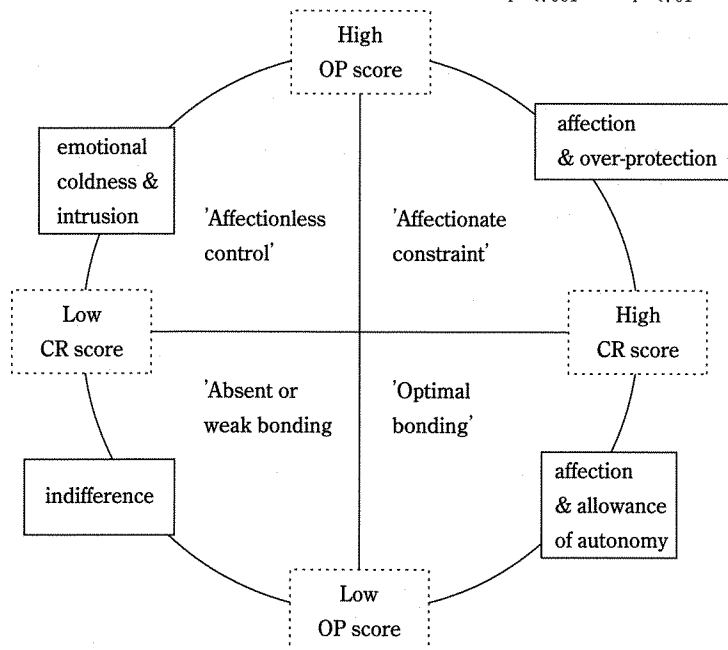


Fig. 1. Parental bonding の4タイプ

OP:over-protection; CR:care.

□内は、タイプの特徴

う認識を持っていたり、子育てによる欲求不満を強く感じやすいことが示された。また、“over-protection”の項目が高い、自分の母親が過保護あるいは干渉的・統制的であったと感じている場合は、子どもの自分に対する愛着の薄さを感じる傾向にあることが示唆された (Table 2)。しかし、親の養育態度のうち、“over-protection”の影響は“care”要因に比べ、あまり顕著ではなかつ

た。“over-protection”は、“care”との関連で意味合いが変わってくると考えられるため次にこの2軸を組み合わせて比較を試みた。“care”項目と“over-protection”項目それぞれを中央値から分け、Fig. 1 に示した4つのparental bondingのタイプに分類し、“care”の軸が高く“over-protection”の軸が低いグループを1群、“care”と“over-protection”の軸が共に高いグループを2群、“care”が低く“over-protection”が高いグループを3群、“care”と“over-protection”の軸が共に低いグループを4群とした。PBIの各タイプと育児ストレスの関連をみると総得点・親領域得点・子領域得点のすべてにおいて、1群が最もストレス得点が低く、次いで、2群、4群と続き、3群は、すべてにおいて最もストレスの得点が高かった (Table 3)。分散分析の結果、総得点と親領域得点に群の間の差の有意傾向がみられ ($F(3, 33) = 2.368, p < .10$, $F(3, 33) = 2.327, p < .10$)、多重比較の結果、自分の母親は、愛情をもって保護的に接してくれたが、干渉は少なく自律を奨励してくれていたと思える母親の場合(1群)は、育児に関する不満や困難、ストレスはあまりなく、その逆に、母親は愛情はなかったが干渉的で統制的であったと回想する母親の場合(3群)は、育児上の不満、困難、ストレスが高くなりやすいことがうかがえた。(p < .05)。これらは、藤井 (1991) の結果とも一致する。

さらに細かにPBIの養育タイプとPSIの各因子との関連をみてみると、1群のストレスが低く3群が最も高いという傾向は、PSIの6因子中4因子にみられ、育児に関する様々な面でのストレスの感じ方に、母親の養育の体験が影響することが示唆された (Table 4)。分散分析及び多重比較の結果、親役割による欲求不満をあらわす第3因子に群の間の差がみられ ($F(3, 33) = 3.377, p < .05$)、1群は3群・4群より育児ストレスが低く (p < .05)、特に子どもがいるた

Table 3 PBI タイプ別 PSI 総得点・親領域得点・子領域得点の平均 (SD)

PSI	PBI タイプ					
	全体	1 群 (n =11)	2 群 (n = 8)	3 群 (n =10)	4 群 (n = 8)	
総得点	154.8 (24.6)	143.0 (24.6)	148.4 (20.0)	167.9 (25.4)	160.9 (20.8)	1 < 3 *
親領域	98.9 (15.5)	91.1 (14.6)	95.8 (14.8)	106.8 (15.4)	102.9 (13.6)	1 < 3 *
子領域	53.4 (12.0)	49.6 (12.0)	50.1 (8.2)	58.7 (15.5)	55.4 (8.8)	

* P < .05

Table 4 PBI タイプ別 PSI 因子別得点の平均 (SD)

	PBI タイプ					
PSI	全体	1 群 (n=11)	2 群 (n=8)	3 群 (n=10)	4 群 (n=8)	
因子 1		39.5	39.0	46.8	43.1	
親としての自信のなさ		(7.9)	(7.5)	(7.6)	(7.5)	
因子 2		34.2	34.4	40.5	39.6	
子どもの行動特徴の懸念		(9.9)	(6.9)	(12.0)	(8.0)	
因子 3		24.5	30.5	32.8	33.6	
親役割による欲求不満		(7.9)	(5.8)	(8.0)	(5.8)	1 < 3 * 1 < 4 *
因子 4		20.5	18.3	21.2	18.1	
夫の非協力・家族との対立		(3.5)	(6.3)	(3.3)	(3.6)	
因子 5		8.3	8.5	10.4	9.4	
子どもと bond の弱さ		(2.7)	(1.7)	(2.8)	(2.9)	
因子 6		16.4	18.3	16.9	17.5	
子どもとの bond		(2.9)	(5.5)	(2.3)	(4.9)	

* P < .05

めに生じる様々な拘束感や不自由感といった不満に過去の養育体験が影響することが示された。自分の母親は自分に愛情を持って接してくれ干渉や統制は少なかったと思える母親は、子育てでの自分の役割を受容し、自信をもって育児に携わっているが、自分の母親は愛情がなく統制的だった、あるいは、無関心だったと感じている場合は、親であることに否定的な感情や拒否感を抱きやすいといえる。

2 母親の受けた養育が母子関係に及ぼす影響

母親から受けた養育が現実の母子関係へどのように影響するかを次にみてみた。対象児のAQSの分布は、 $-.230 \sim .799$ で、平均は $.429$ であった。子どもの頃の養育態度の“care”の項目と“over-protection”の項目それぞれについて、実際の母子関係との関連を調べた。その結果、母親の受けた養育が、愛情があり、保護的で共感的な場合、Qソートの得点が高く、子どもとの愛着関係が安定していることが示された ($t=3.579$ $p<.01$)。しかし、母親の養育態度が、統制的であったか、放任であったかということでは、Qソート値に差がみられず、乳幼児期の母子関係に影響を与えるのは、母親がその母親から愛情深い温かな、共感的養育を受けたと思うかどうかだといえる。さらに、母親の受けた養育体験を4つのタイプに分けてそれぞれのQソート値の平均を比べてみると、最もQソート値の平均が高かったのは、望ましいきずなを形成していると考えられている1群ではなく、母親の養育を愛情はあったが干渉的・過保護だったと回想した2群であった。また、最も低かったのは、母親は無関心であったと考えている4群であり、次いで、3群も4群とはほぼ同じ程度に低かった (Table 5)。分散分析と多重比較の結果、2群は3・4群 ($p<.01$) より、また1群も3・4群 ($p<.05$) より愛着の評定値が高く、安定した愛着関係が形成されていることがうかがえた ($F(3, 33)=3.399$, $p<.05$)。すなわち、干渉的・統制的養育を受けたということは、単独では愛着の形成との関係が見いだされず、愛情があったかどうかという“care”の要因とからめて検討しても、親から干渉的養育を受けたことは、必ずしも現在の子との間の愛着の形成にマイナスとはいえないことが示された。

IV 総合的議論

本研究でも藤井 (1991) の先行研究と同様に母親の養育体験が現在の育児に関わる不満や困難、ストレスの感じ方に影響することが示された。また、母親から愛情のない拒否的で統制的な養育を受けると、育児の様々な面で不満や困難、葛藤を抱きやすく、親としての役割を受容しがたいことがうかがえた。

Tronick (1996) らは、情緒的コミュニケーションシステムという考えの中で、相互作用において乳幼児の表出する情動に対して養育者がうまく調整し、いかに子どものネガティブな情動をポジティブに変えていくかということが、自己や他者の表象の形成に作用し、子どもの行動・感情表出の特徴・感情の特性に大きく影響するとしている。うまく調整されない経験は、ネガティ

Table 5 PBI タイプ別のアタッチメントのQソート平均値 (SD)

	PBI タイプ			
	1 群	2 群	3 群	4 群
Q ソート値	.510 (.172)	.616 (.111)	.312 (.310)	.279 (.229)

** $p<.01$ * $p<.05$

ブな情動がうまくコントロールされず、常にネガティブな情動が喚起されたり、子ども自らがコントロールしようとするために、事象から逃げたり、避けたり、他のもので代用したりという行動に向かわせるという。そう考えると、3群の親は、自分の感情や考えに従って子どもの行動をコントロールするため、子どもの要求と親の要求が一致した時のみ充足され、それ以外の場面で子どものネガティブな情動がいつも喚起されているという状態にあるといえ、一方4群の場合は、親との関わりそのものが希薄なため、自ら対処するために避けたり代用するといった方法を子どもがとりやすく、こうした幼少時に獲得された情動制御の様式が4群の母親の育児ストレスを、3群より低くしたと思われる。

本研究では、さらに実際の母子の観察を通して、母親の養育体験の影響を検討した。その結果、愛情ある温かな養育を受けた母親は自分の子どもとの間に安定した愛着関係を築けることが示された。今回Qソートという子どもの内的ワーキングモデルを反映する愛着の評価法を用いた結果、母親の内的ワーキングモデルの反映である養育体験の想起と子どもの内的ワーキングモデルの形成との関連が見いだされ、世代間伝達の考えを裏付ける結果が得られた。また、PBIを用いたことで、愛着のタイプ分けによらない愛着表象を捉えることができ、養育態度で愛情・情愛的温かさ・共感性という要因の重要性が導き出された。しかし、これはあくまでも養育の受け手側が過去を振り返って出した認識である。愛情のない母親は少ないだろうし、多くの母親が懸命に育児をしているはずである。だとしたら、何が子どものこうした認識の差をもたらすのだろうか。これまでの研究では、愛着の形成と母親の感受性との関連が指摘されているが、それ以外の行動では愛着形成を予測するデータはほとんどでていない。どういう行動が子どもに“愛情があった”と実感させるのか、具体的な行動の検討が今後必要であろう。

今回の結果で非常に興味深いのは、PBIの4つのタイプでQソート値を比べたところ、母親は愛情はあったが干渉的・過保護だったと回想した2群が最も高い値であったことである。仮に、母親の受けた養育が母親の子に対する実際の養育行動と類似すると仮定するなら、乳幼児期の養育が多少過保護的であっても愛情があれば、養育を全面的に依存するこの時期は子どもの愛着の形成に支障をきたさないということがいえるのではないだろうか。これを前述の情緒的コミュニケーションシステムから説明を試みると、1群と2群の養育態度の違いは、例えば、子どもが目への欲しいものに手が届かずぐずっている時に、それを子どもがとれるところまで近づけてあげるか、または、自分がとって渡してしまうかの違いといえ、どちらも、ネガティブな情動をポジティブに変えるという点では、大きな差がない。だとすれば、乳児期のこうした情動のコントロールのあり方が母子関係に大きな影響を与えると仮定することができ、これは、今後の重要な検討課題といえるだろう。また、過保護が子どもの発達に問題がないかどうかは、縦断的に親子を追跡し、乳幼児期以外の時期での子の自立に対する影響という点も検討する必要があると思われる。乳幼児期の愛着の安定という観点からは問題は見いだせなかったが、そののちのしつけや自立といった場面で問題となってくることは、十分に考えられる。

これまでのAAIを用いた研究では、養育の善し悪しよりも、インタビューでの語りの整合性や想起のしやすさに焦点があてられてきた。ゆえに、質問紙による調査では、愛着の表象を捉えることには限界があると考えられてきた。しかし、今回親の養育態度から、親とのきずなを評価

する Parental Bonding Instrument を用いた結果、養育体験と現在の母子関係との関連がみいだされ、愛着の表象を捉える要因として愛情・情愛的温かさ・共感性という“care”要因の重要性が指摘でき、愛着のタイプ分けによらない方法としてその有用性がある程度示されたといえる。しかし、これまでの研究では、不幸な養育体験をもちながら、それを自己の中で統合整理し、子どもとの間に安定した愛着関係を築いている多くの母親の存在が指摘され、それは、臨床的な面接によって把握することが可能と考えられている。ひとつの尺度で得られた結果が、その人の表象すべてを捉えたものではないということを、肝に銘じて使用することが必要と思われる。また、今回は、母親に養育体験の調査をしたのは既に10ヶ月の子どもをもっている時期であったため、自分の子を実際に養育することで親についての回想が、影響を受けている可能性を否定できない。しかし、子をもつことで修正されたとしても、育児に携わっているある時点での親に対する回想とこの母子関係については、関連があるということは明らかに示されたといえよう。

本研究では、AAI や SS 法といった従来の道具を用いずに母親の受けた養育と子どもとの愛着について検討し一定の成果があった。一方、どのように作用するのかといったプロセスに関しては、多くの課題が残されている。今後検討されるべきことは、内的ワーキングモデルが、どのように形作られ、またどのような機序で行動に作用するのか、そして様々な体験ひとつひとつは、ワーキングモデルの修正と更新にどのように影響するのかについての理論を実証的に証明していくことと思われる。

(注1) 因子の名称は、藤井の因子分析の結果に従った

(注2) 愛着のQソート法の日本語訳は、近藤・Vereijken によるものを用いた

謝 辞

本研究を行うにあたって、平成7年度及び8年度文部省科学研究費基礎研究(C)「乳児の気質特徴と情動制御能力の発達」(研究代表者 陳省仁、課題番号07801018)の研究対象者と同研究の資料の一部を用いた。本論文をまとめるにあたり、ご指導いただきました北海道大学教育学部助教授 陳省仁先生に深く感謝いたします。また、愛着のQソート法の実施にあたりご助言いただきました大阪大学人間科学部 近藤清美先生に厚く御礼申し上げます。

引 用 文 献

- Ainsworth, M. D. S., & Eichberg, C. G. 1991 Effects on infant-mother attachment of mother's unresolved loss of an attachment figure, or other traumatic experience. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hind & P. Marris (Eds.), *Attachment Across the Life Cycle*. Tavistock / Routledge
- Abidin, R. R. 1983 Parenting Stress Index Manual. *Pediatric Psychology Press*
- Benoit, D., & Parker, K. C. H. 1994 Stability and Transmission of attachment across three generations. *Child Development*, 65, 1444-1456
- Biringen, Z. 1990 Direct observation of maternal sensitivity and dyadic interactions in the home: Relations to maternal thinking. *Developmental Psychology*, 26, 278-284
- Bretherton, I., Biringen, Z., Ridgeway, D., Maslin, C. & Sherman, M. 1989 Attachment: The parental perspec-

- tive. *Infant Mental Health Journal*, 11, 237-252.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss. Vol. 1: Attachment*. New York: Basic Books
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss. Vol. 2: Separation*. New York: Basic Books
- Bowlby, J. 1977 The making and breaking of affectional bonds. *British Journal of Psychiatry*, 130, 201-210
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss. Vol. 3: Loss, sadness and depression*. New York: Basic Books
- Bowlby, J. 1988 *A Secure Base: Clinical Applications of Attachment theory*. London: Tavistock / Routledge
- Crittendon, P. M. 1990 Internal representation models of attachment relationships. *Infant Mental health Journal*, 11, 259-277
- Crowell, J. A., & Feldman, S. S. 1988 Mother's internal models of relationships and children's behavioral and developmental status in mother-child interaction. *Child Development*, 59, 1273-1285
- 遠藤利彦・江上由美子・鈴木さゆり 1991 母親の養育態度・養育行動の規定因に関する探索的研究 東京大学教育学部紀要, 31, 131-152
- 遠藤利彦 1992a 内的作業モデルと愛着の世代間伝達 東京大学教育学部紀要, 32, 203-220
- 遠藤利彦 1992b 愛着と表象-愛着研究の最近の動向: 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証的研究の概観- 心理学評論, 25, 201-233
- Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. 1991 Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child development*, 62, 891-905
- 藤井まな 1994 Parental bond に関する基礎的研究-育児ストレスとの関連性- 教育学科研究年報, 20, 89-103
- Haft, W. L., & Slade, A. 1989 Affect attunement and maternal attachment: A pilot study. *Infant Mental health Journal*, 10, 157-172
- 数井みゆき 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児をもつ家族について 発達心理学研究, 7, 31-40
- 数井みゆき 1995 親役割ストレス・夫婦関係・親子関係の父母比較-家族システムの視点に立って- 家庭教育研究所紀要 17, 73-83
- 近藤清美 1993 乳幼児におけるアタッチメント研究の動向とQ分類法によるアタッチメントの測定 発達心理学研究, 4, 108-116
- 久保田まり 1995 アタッチメントの研究: 内的ワーキングモデルの形成と発達 川島書店
- Main, M., & Goldwyn, R. 1984 Predicting rejection of her infant from mother's representation of her own experience: implications for the abused-abusing intergenerational cycle. *Child Abuse Neglect* 8, 203-217
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds), *Growing points in attachment theory and research. Monographs for the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104
- 牧野カツコ 1981 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉 家庭教育研究所紀要 3, 34-56
- 松本忠久 1989 日本人小児のアタッチメント分類の特性についての一考察-母子共生的結合の観点から- 早稲田心理学年報, 21, 41-51
- 野沢みつえ 1988 Parenthood に関する基礎的研究- Parenting Stress Index 翻訳の検討- 日本教育心理学会 30回総会論文集, 442-443
- 野沢みつえ 1989 親業ストレスに関する基礎的研究 関西学院大学院研究科年報, 15, 35-56
- 小川雅美 1991 PBI (Parental Bonding Instrument) 日本語版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学,

- 6, 1193-1201
- 大西美代子 1996 成人の愛着表象と家族関係との関連—日本の文化的視点からの検証 家庭教育研究所紀要 18, 79-90
- Oppenheim, D., Emde, R. N., & Warren, S. 1997 Children's narrative representations of mothers: Their development and associations with child and mother adaptation. *Child Development*, 68, 127-138
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. 1979 A parental bonding instrument. *British Journal of medical Psychology*, 52, 1-10
- Perris, C., Arrindell, W. A., Perris, H., Eisemann, M., Vanderende, J., & von Knorring, L. 1986 Perceived depriving parental rearing and depression. *British Journal of Psychiatry*, 148, 170-175
- Posada, G., Water, E., Crowell, J. A., & Lay, K. 1995 Is it easier to use a secure mother as a secure base? : Attachment Q-sort correlates of the adult attachment interview In I. Bretherton & E. Waters (Eds), Growing points in attachment theory and research. *Monographs for the Society for Research in Child Development*, 60, 133-145
- Sroufe, L. A., Jacobvitz, D., Mangelsdorf, S., DeAngelo, E., & Ward, M. J. 1985 Generational boundary dissolution between mothers and their preschool children: A relationship systems approach. *Child Development*, 56, 317-325
- Steele, H., Steele, M., & Fonagy, P. 1996 Associations among Attachment Classifications of mothers, fathers, and their infants. *Child Development*, 67, 541-555
- Takahashi, K. 1986 Examining the Strange-Situation procedure with Japanese mother and 12-month-old infants. *Developmental psychology*, 22, 265-270
- 高橋義信 1991 Strange Situation を用いた愛着関係に関する従来の研究—その意義と問題点—三宅和夫編著 乳幼児の人格形成と母子関係 東京大学出版会
- 竹内美香・鈴木忠治・北村俊則 1989 両親の養育態度に関する因子分析的研究 周産期医学, 19, 852-856
- Tronick, E. Z. 1989 Emotions and emotional communication in infants. *American Psychologist*, 44, 112-119
- Vereijken, C. 1995 *The mother-infant relationship in Japan: attachment, dependency, and amae*. Labyrinth Publication
- Waters, E., & Deane, K. E. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationship: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton & E. Waters (Eds), Growing points in attachment theory and research. *Monographs for the Society for Research in Child Development*, 50, 41-65

〈付録資料〉

Parental Bonding Instrument (PBI)

〈“Care” の項目〉

- 1 いつも暖かく親しみのある声で話しかけてくれた。
- 2 * 私が望んでいるのに十分助けてくれなかった。
- 4 私には、気持ちの上で冷たかった。
- 5 私の抱えてる問題や悩みを理解してくれていたと思う
- 6 私に優しく、情愛があった。
- 10 * 私プライバシーを無視していた。
- 11 私とあれこれ話し合うのを楽しみにしていた。
- 12 私にたえずほほえみかけてくれていた。
- 14 * 私が必要としたり、望んでいることを理解しているとは思えなかった。
- 16 * 自分は求められていない存在だと思い知らされた。
- 17 気分的に混乱したような時は、気持ちを落ち着かせてくれた。
- 18 * 私と話し合うということはなかった。
- 24 * 私をほめてくれたことがなかった。

〈“over-protection” の項目〉

- 3 * 私のしたいたいいのことはやらせてくれた。
- 7 * ものごとを、私が自分自身で決めるのを望んでいた。
- 8 私に大人になってほしくないようだった。
- 9 私のする事は何でもコントロールしたがった。
- 13 私を子ども扱いしがちだった。
- 15 * 私自身に決定を下させた。
- 19 私を、つとめて親に依存的にさせようとしていた。
- 20 私のことを親がいなければ自分のことも処理できないと思っていた。
- 21 * 私の望みのままに、自由にさせてくれた。
- 22 * 私が望めば、いつも外出させてくれた。
- 23 私には過保護だった。
- 25 * どんな服装をしようとわたしの好きなようにさせてくれた。

(* 逆転項目)

母親の育児に関する認識について (Parenting Stress Index の一部)

〈1 親としての自信のなさ〉

- ・自分自身、親の役割を十分はたしていないのではないかとすることがある。
- ・子どもをいろいろしつけてきたが、だいたいうまくいっていると思う。*

- ・子どものどんな問題にでも親として対処できるか自身がない。
- ・自分は親として少し問題があるのではないかと思うことがある。
- ・子どもが何をして欲しがっているのかつかめなくて、いらいらすることがある。
- ・やっとしつけができたと思っても、ちょっとしたことですぐ逆戻りするのでがっかりすることが多い。
- ・病気にかかりやすいので、しょっちゅう医者の世話にならねばならない。
- ・親としてやっていくのは、予想していた以上に難しい。
- ・子どもが聞き分けがなかったり、ひどくむずがったりすると自分の育て方が悪かったのではと思ってしまう。
- ・子どもの心の動きのすみずみまでわかってやれるようになるのはとても難しい。
- ・時々子どもの将来を考えて不安になることがある。
- ・この子が成長すれば成長したで、けがをしないか、悪いことがおこらないかと、よけい心配になってくる。
- ・母親としてしつけや教育のすべてをまかされるのは、私にとって負担が大きすぎる。
- ・子どもを育てていく上で、どうしつけたらよいのかわからなくなる。
- ・この子の睡眠、食事などの日課や習慣を確立するのはとても苦勞する。

〈2 子どもの行動特徴に関する懸念〉

- ・よその子に比べて、泣いたりわめいたりだだをこねることが多い。
- ・この子は、何か欲しいとなると、すぐに聞き分けがなくなってしまう。
- ・かんしゃくをおこすと、なだめる方法がないほど激しくむずがることが多い。
- ・気に入らないことがあると、すぐにすねたり、しよげかえったりする。
- ・ところかまわず聞き分けをなくすので困ることが多い。
- ・いったんだだをこね始めると思い通りになるまでだだをこね続ける。
- ・泣いたり、ぐずついたりし始めると、いつまでたっても泣きやまないことが多い。
- ・ちょっとしたことで機嫌がころころと変わりやすい。
- ・よその子どもよりも、育てにくいのではないかと思うことがある。
- ・こちらの思惑で何かをさせたり、やめさせたりするのはとても難しい。
- ・迷惑をかけるに違いないから、この子を人には預けられない。
- ・よその子に比べて、落ち着きがない。
- ・親の私がまいってしまうほど、この子は、ほんのしばらくの間もじっとしていない。
- ・ほかの子に比べひとつのことに注意を集中したり、興味を持ち続けるのがにがてのようである。
- ・一人遊びをさせようとしても、ほんの10分ももたない。
- ・環境や生活のちょっとした変化でも、なじませるのがとても時間がかかる。

〈3 親役割による欲求不満〉

- ・私の生活はほとんど子どものために費やされている。
- ・子育てに追われて、自分の好きなことや新しいことにチャレンジすることがなくなった。
- ・いつも親の義務や責任にしばられていると感じる。
- ・結婚前の自分には考えられもしないほど、子どものために自分の生活を犠牲にしている。

- ・子どもがいるために自分のしたいことや習いたいことが制限されてしまった。
- ・親であることも大切だけど、自分の生活も少しは大切にしなければと焦りを感じる。
- ・子どもがいるので、趣味の会や集まりに出かけたり、友達と会ったりすることができないでいる。
- ・気分転換が上手な方だから、ストレスがたまるようなことはない*
- ・この子の要求に、私の生活は、支配されていると思うことがある。
- ・何事につけ、以前のように夢中になれなくなった。

〈4 配偶者の非協力・家族との対立〉

- ・子どもができると、夫婦の間にも思いがけない行き違いがいろいろできてくることを経験した。
- ・子どもができたと、夫は助けてもくれないし、手伝ってもくれない。
- ・子どもができてから私は性的関心が少なくなった。
- ・子どもはできたけれど、私の描いていたアットホームな家族像にはまだ程遠い。
- ・夫は子どものことにあまり興味がないようである。
- ・子どもができてから、夫の両親や家族との間に気詰まりな問題や意見の対立が目だってきた。
- ・子どもの育て方やしつけの方針について、私と家族の考え方にはかなり開きがある。

〈5 子どもとの bond (きずな) の弱さ (emotional coldness, neglect)〉

- ・ひょっとしたら、この子は私を嫌っているのではないかという気がするがたまにある。
- ・なかなか笑顔を見せてくれないので、てごたえがなくて、ものたりない思いをすることがある。
- ・抱きあげたり頬ずりしたりしても、気持ちが通じていないような気がするがことがある。
- ・この子と私は、相性が悪いのではないかと思うことがある。
- ・この子のためにいろいろ尽くしているのに、親の気持ちが通じていないのではないかと思う。
- ・心のどこかで、子どもを拒否しているのではないかとふと思う。

〈6 子どもとの bond (きずな) (closeness, affection)〉

- ・この子は、誰よりも私になついていて。*
- ・私は親であることに生きがいを感じる。*
- ・私にとってこの子のいない生活などとうてい考えられない。*
- ・この子はほかの誰よりも私を必要としている。*
- ・子どものためになるのなら、少々無理をしても何でもやってやりたい。*
- ・身の回りに心を許して話しあえる人が誰もいないのでひとりぼっちだという気がする。
- ・子どものためとはわかっていても、気の進まぬことがよくある。

(※逆転項目)